

経済思想家としてのルーヨ・ブレンターノ —経済論と宗教論の双方に見出される共同体的人間観の一貫性—

渡 邊 碩*

概 要

本稿は、ドイツ新歴史学派の経済学者ルーヨ・ブレンターノの経済論と宗教論の双方に一貫した思想的特徴が、「共同体的人間観」、すなわち人間の共同性を最重視する社会ヴィジョンである点を論証する。先行研究は、ブレンターノに内在的な視点から、経済思想家としての特質を解明してきたとは言いがたい。本稿では、特にブレンターノのカトリック的背景に注目することで、労働組合論などの政策提言から、宗教史論に至るまで、独自の有機的社会観、並びに一貫した問題関心が見出される点を主張する。具体的な分析対象は、1923 年に編纂された論文集『歴史の中の経済人』である。同書を執筆背景と合わせて分析することで、「共同体的人間観」を主軸とする思想的特徴を析出することを試みた。また、彼の社会観を重視することで、従来は等閑視されてきたカトリック社会論などの位置づけも考察することができ、19 世紀ドイツ経済思想史の全体像に接近し得る点を展望した。

キーワード：ルーヨ・ブレンターノ、ドイツ新歴史学派、カトリシズム、有機体説的発想、マックス・ヴェーバー

I 序論

ルーヨ・ブレンターノ（Lujo Brentano, 1844–1931）は、グスタフ・シュモラー（Gustav von Schmoller, 1838–1917）と並ぶドイツ新歴史学派の中心人物とみなされている。本稿は、ブレンターノの思想的特徴が一貫して資本主義における共同性解体を問題視しながら、新たな人間結合を模索し続けた経済的・宗教的認識に認められる、という点を『歴史の中の経済人』[1923]から立証する。以下では研究史に即して本稿の視角を設定したい。

まず指摘すべきは、従来の関心が彼の経済・社会思想の全般の特徴ではなく、次の二点に向けられてきた点である¹⁾。第一は、自由主義的理念による社会政策論への着目である²⁾。ここでは、社会政策学会で労働組合論を提起し続けた「左派」としての位置づけが問題とされてきた。第二に、「資本主義の精神」を論じたマックス・ヴェーバー（Max Weber, 1864–1920）との関係も、ブレンターノへの注目を集めてきた³⁾。なかでも大塚久雄は、論争の整理を通じて両者の問題設定自体が異質であり、齟齬が生じていた点を解明した⁴⁾。

* 京都大学大学院経済学研究科

1) 研究状況や主要文献に関して、日本語圏については石坂 [2016], 91–95 頁に、英・独語圏については Ghosh [2016], pp. 17–20 に有益な記述があり、先行研究把握の参考とした。

2) Sheehan [1966], 前谷 [1984], 中村 [1999] など。

3) 大塚 [1969], 竹林 [2022] など。

4) 主だった論稿は大塚 [1969] に所収。具体的には、ブレンターノが商業資本主義における営利欲求一般を「資

意義深いのは、二つの潮流がそろってブレンターノの社会観を潜在的論点と意識している点である。まず、第一の研究群においては自由主義というラベルに収まり切らず、ヴェーバー等とも異なる「有機体説的発想」の存在が示唆されてきた⁵⁾。また、第二の研究群における大塚 [1969] にも次のような記述がある。ブレンターノとヴェーバーの対比について「カトリック＝アングリカン対ピューリタンの精神的対立」が見出されると指摘した後、大塚自身が扱う社会経済史的な論点だけでなく、「両者の見解の対立は実は意外に深い内面的根底に連なっているというべきであろう」と、両者の論争が宗教社会観的な前提の異質性に根ざす点を的確にも示唆していたのである⁶⁾。

二潮流のこれらの関心に相当程度応えている点で注目すべきが Ghosh [2016] である。当該論文はヴェーバーとブレンターノについて、世代的特質、精神把握方法論、経済観、歴史観における対立を整理しており、両者の関係性を広範な知的背景において明示することに成功した。すなわち、自然主義的な「資本」把握に依拠したブレンターノから、独自の「倫理」概念を初めて問題視したヴェーバーへの時代転換を論じた Ghosh [2016] は、現時点でブレンターノ思想への最も包括的な考究でもある。

しかしこれらを含めても、未だ残された課題は、ブレンターノ個人に内在的な視点から思想の全体的特徴を掘り起こすことである。特に本稿が重視するのは、ブレンターノの有機的社会観に深甚な影響を与えている宗教性である。確かに Ghosh [2016] などによって、ブレンターノのカトリック的背景の意義が部分的に解明されてきた⁷⁾。ただし、他の思想家から独立して彼に固有の宗教的意識まで踏み込み、大塚がいう「深い内面的根底」に接近する試みが完遂されたとはいえない。言い換えれば、伝記的要素まで加味しつつブレンターノの内面で一貫していた問題意識の連関を解き明かすことは、重要な主題として残されている。

以上より、先行研究から得られた本稿の仮説は、ブレンターノの思想の特徴が人間紐帯の有機性を重視する点にあり、それらは（従来、活発に論じられてきた）社会政策の文脈で表明されているだけでなく、（未だ十分に研究が進展しているとはいえない）宗教的背景に根差していたのではないかと、いうものとなる。したがって、「組合への労働者の結集」を提唱する前提にも実は「近代的・カトリック的な共同性の解体による近代社会の問題点」を克服しようとする思考がはたらいており、その両者をつなぐのがブレンターノの実存に根差した「共同体的人間観」⁸⁾と呼び得るヴィジョンである、という思想上の内的構造を論証することが本稿の目的となる。

本主義精神」とみなしていたのに対して、ヴェーバーは産業資本主義におけるエートスを「資本主義の精神」と措定していた、と総括することで、ヴェーバーの優位性を強調した。

5) 中村は適切にも、ブレンターノとヴェーバーなどの相違を「歴史意識と人間把握の差異」と指摘しつつ、新歴史学派間での特徴については「ブレンターノ（自由派）にあっては、有機体説的発想を残しながらも、しかし市民社会優位の発想がとられている」点に求めた（中村 [1999], 45 頁）。市民社会的理念と有機体説発想の独自の整合性について、本稿 IV 章を参照。

6) 大塚 [1969], 10 頁注 3。

7) Ghosh [2016] はブレンターノについて「きわめてリベラルで世俗化したカトリックであり、頻繁に聖職者たちを憤激させてはいたものの、カトリックの知的伝統を利用して」重要性を指摘する（Ghosh [2016], p.22）。ただし、それらの要素が社会観や人間観そのものに密接な連関をもたらしていた点は本格的な考察の対象となっていない。また、Sheehan [1966] もカトリック的背景を視野に入れているが、それらは保守主義的な秩序観としてのみ回収される傾向にある（同書の p.165 などを参照）。

8) 「共同体的人間観」はブレンターノ分析にあたって本稿が導入した概念である。

主たる分析対象は、1923 年に公刊された論文集『歴史の中の経済人』である⁹⁾。全 11 章の同書は従来、ヴェーバーやゾンバルトを批判した末尾の 4 編だけに関心が集中する傾向にあった¹⁰⁾。しかし、1888 年から 1916 年までの論説を集成した本書は表題の通り人間論を全編の主題としており、ブレンターノの宗教観と社会観をも明示する代表的著作といえる。本稿では、同書の特に前半部について執筆の背景とも対照させながら読解することで、経済論と宗教論に貫かれている共同体の人間観を析出したい。

第Ⅱ章では、経済論に表明された共同性意識を分析する。孤立した個人を前提とする古典派経済学の認識を、ブレンターノが政策・理論の両面から批判する一方で、共同団体としての労働組合への結集を資本主義の問題への処方箋とみなした経済論を描写する。

第Ⅲ章では、宗教論に内在する共同性意識を解明する。ブレンターノは家庭環境に端を発し、カトリックの知的世界において問題意識を涵養した。ただし、カトリシズムの影響を受けた人間結合の原理を想定しながらも、近代では世俗的次元（具体的には労働組合）において再結合が実現される必要がある、とみなした独特の宗教的意識であることを指摘する。

第Ⅳ章では、経済論・宗教論の双方で共同体の人間観が一貫していた点を整理する。そのうえでブレンターノの「有機体的」社会観の意味について考察する。また、彼の経済思想が、20 世紀後半以降の論点を先取的に展望していた点などに注目するならば、ブレンターノを解明することからドイツ語圏経済思想に新たな光を当てられる点を論ずる。

第Ⅴ章では、総括と本稿より得られる新たな課題を提示する。

Ⅱ 経済論における共同体の人間観

本章では、ブレンターノの経済論に示された人間観を分析する。従来、組合論などの政策的提案や経済学方法論は個別的に分析される傾向にあったが、本稿は、理論・政策の諸論点を貫いて、共同体への結集の様相を最重視する人間観が見出されることを主張する。

第 1 節は、ブレンターノが経済学を志した段階から主著『現代労働組合論』（Brentano [1871]）へ至るまでの問題意識の生成を扱う。市場競争の補完を組合によって実現したとみなす英国市民社会

9) 章題、原論文の出版年、頁数を下に記載しておく。なお、序文・六・九・十・十一章については邦訳があり、当該箇所から引用する際に、訳書の頁数を漢数字で併記する。

序文：S.vii-xii

一章：古典派経済学（1888 年）：S.1-33

二章：歴史における倫理と国民経済（1901 年）：S.34-76

三章：古代キリスト教の経済教説（1902 年）：S.77-143

四章：教会と自由への発展（1910 年）：S.144-168

五章：所有に対する攻撃の系譜（1903 年）：S.169-203

六章：近代資本主義の諸起源（1916 年）：S.204-260

七章：経済単位概念と変化について（1916 年）：S.261-281

八章：第四回十字軍（1916 年）：S.282-300

九章：商業と資本主義（1916 年）：S.301-362

十章：ピューリタニズムと資本主義（1916 年）：S.363-425

十一章：ユダヤ民族と資本主義（1916 年）：S.426-490

10) 一例として、2008 年版の編者解説（Bräuer und Nutzinger [2008]）において、2 章から 5 章における宗教的論説が全く看過されていることは前半部の宗教論を軽視する傾向として、象徴的である。

をモデルとして彼が、労働組合という実践を提唱している点を概観する。

第2節では、『歴史の中の経済人』第1章にあたる「古典派経済学」[1888]において経済学方法論との関連を明示することによって、個人主義的な経済主体を想定する理論を批判した認識論の意義を考察する。

第3節では、『歴史の中の経済人』第7章にあたる「経済単位概念と変化」[1916]で上記の主題を深化することで、経済主体の離合集散を通じ、社会経済史を統一的に把握する体系を提示した点を考察する。これにより、資本主義の諸問題も共同体の秩序の解体や再生によって、把握あるいは克服される、というヴィジョンが完成された点を確認する。

1 経済学への原初的関心から『現代労働組合論』の組合論まで

本節では、ブレンターノの伝記的経緯を辿ることで、次章における宗教論的背景との関連も意識しながら、経済学を志した関心と共同体的人間観の端緒とを分析する。彼の伝記的研究として、1931年出版の浩瀚な自伝である Brentano [1931/2004] の他に、社会改革の側面に焦点を当てた Sheehan [1966] がある¹¹⁾。以下、主にこの二点に依拠しながら生涯前半期の基礎事実を概観する。

ブレンターノはイタリア系移民にルーツがあり、聖職者の父を持つ。兄には哲学者として高名な フランツ (1838-1917) がおり、ルーヨの生涯に大きな影響を与えた¹²⁾。ブレンターノは「厳格なカトリックで極めて保守的な家庭」¹³⁾ の出身で、彼の宗教理解や人間観は人間共同性を重視するカトリシズムの影響を濃厚に反映している。特に留意すべきが、激動の時期にあった19世紀ドイツのカトリシズムの内部で、労働問題への関心を育んだ点である。教皇至上主義と、それに反発する勢力の対抗については次章で詳しく論ずるが、特に後者のグループと密接な関係にあったブレンターノは、そのなかの代表者であり家族ぐるみの交際があった司教ヴィルヘルム・ケテラー (1811-77) の影響を強く受けた。ケテラーは労働問題など、従来のカトリック教会が無視してきた問題に取り組むことを提唱し、「近代的な経済体制の土台に立った社会改革を、自助と国家からの援助と、国家による労働者保護措置を通して実現するという考え」を、1840年代から先進的に発展させていた¹⁴⁾。ブレンターノが経済学を選び、社会問題の改善を生涯の主題とした関心はケテラーに由来すると思われる¹⁵⁾。

さて、長じてブレンターノはバイエルン邦国で官吏として就職することを志したが、その道が普

11) 以下、本稿での Brentano [1931/2004] の原書からの引用箇所では、2004年版に併記されている1931年版の頁数を表記する。また、ルーヨ・ブレンターノに関する比較的近年の評伝としては Kraus [2000] があり、ブレンターノ家との関連を主軸として生涯の流れが明快に概説されている。本節で扱うルーヨと兄や家系的出自との関連などについて詳しくは、当該書籍を参照のこと。

12) 次章で扱う、ローマ・カトリックに対するルーヨの反発も、彼独自の宗教的思索に基づくというよりは、教皇不可謬宣言に反発するフランツに同調する部分が大い。

13) Brentano [1931/2004], S.17, 16頁。

14) ニッパダイ [2023], 47頁。カトリック社会論の先駆者としてのケテラーについては詳細に関して桜井 [2019] を参照。同書ではブレンターノとの密接な関係性も明示されている (同書の215-7頁を参照)。

15) なぜブレンターノが生涯の研究対象として経済学という学問分野を選んだのか、その理由は自伝には述べられておらず、Sheehan [1966] にも考察はない。同様に、社会問題への関心をどのように抱くことになったか、という点に関する記述も存在しない。本稿では、カトリック的環境から、それらへの関心が内化された可能性を強調したい。

塙戦争の敗北で閉ざされたことで、経済的・精神的独立を保証する大学教授を目指しつつ、経済学を専攻したという。このような出発を辿ったブレンターノの経済学へのスタンスは、社会政策学会でのライバルのシュモラーと好対照をなしている。シュモラーは代々の官僚的家系の出身で、ドイツ国内の具体的な経済的事実を解明することに最大の意義を見出し続けた¹⁶⁾。これに対してブレンターノはプロイセンの国家体制への批判意識を一貫して抱き、英国発祥の労働組合という共同体的結合を実現する道筋を模索した。次節で論ずる問題設定の相違も、これらの軌跡に端を発している。

ゲッティンゲン大学で学位取得後のブレンターノは、ベルリンのプロイセン統計局に所属することで、社会改革につながる国家統計の調査に従事した。イギリスでの研究旅行を経て 1869 年に帰郷した彼は上述の問題意識に沿った研究を主著『現代労働組合論』にまとめて、教授資格論文としてベルリン大学に提出した（1871 年¹⁷⁾）。

同書は「イギリスに実在する労働の組織およびその歴史的発展の叙述と批判」¹⁸⁾を通じて、同国の労働組合制度を「完全な自由を基礎とする国民経済学の不可欠な補完」¹⁹⁾と評価する画期的著作であった。本書でブレンターノは、「古いギルドの後継者が労働組合の姿をとって成長し、その中で労働者は…大資本家に対して、いたるところで結束した」²⁰⁾歴史過程を描いており、イギリスの労働組合運動が 19 世紀を通じて勃興した意義を、同時代のドイツのための模範的事例として叙述している。同書は優れた実証研究として広い注目を集め、これを高く評価したシュモラーが、ブレンターノと接触し社会政策学会を結成することとなった。

なおブレンターノは、「私は、『労働者ギルド』を書いた時すでに、根源的な経済単位 *die ursprüngliche Wirtschaftseinheit* は個人ではなく、家族だと認識していた」と自伝で回顧する²¹⁾。「経済単位」とは本章 3 節で分析する独自の概念体系であり、その原型を初期から意識していたとブレンターノは見ている。もっとも『現代労働組合論』には経済単位という概念は明示されておらず、ギルドや組合における内的な扶助関係と、組織相互の対立性が示されているだけである²²⁾。ただし、労働者が個人として経済関係を結んでいる状況では市場法則が適正に機能せず、相互扶助を行う組合等に結集することで初めて公正な条件が成立し得る、という政策的主張は次節で見る理論認識につながっている。

さて、同書で教授資格を得たブレンターノは、ブレスラウ大学（1872-81）とシュトラースブルク大学（1882-87）の教授職を経た後、1888 年にウィーン大学に赴任した。ここでウィーン大学教授カール・メンガーとシュモラーとの「方法論争」に巻き込まれたことで、ブレンターノは理論面での共同体の人間観の彫琢を迫られた。

16) シュモラーについて田村 [1993] を参照。両者の個性の対比については、同書の 36 頁や 65 頁の注 61 に興味深い記述がある。

17) 続巻は独立して 1872 年に公開。

18) Brentano [1871], S. V. i 頁。

19) *Ebenda*. S.IX-X, v 頁。

20) *Ebenda*. S.88, 108-9 頁。

21) Brentano [1931/2004], S.190, 213 頁。

22) 序章の I 項で、ゲルマン系の民族では家族からギルドが発展した過程を強調している。

2 「古典派経済学」への人間論的批判

本節では、著名な「古典派経済学」講演を行った際の文脈と意義を明らかにしたい。同講義は従来、歴史学派的な見解の披瀝と捉えられてきた²³⁾。しかし、ブレンターノ自身の目標は「方法論争」におけるシュモラーとの共同戦線を張る点ではなく、人間論に裏付けられた独自の経済学論を展開することであった。この点を明示するために、方法論争と彼の関係性を論じたい。

周知のように「方法論争」は、理論的・演繹的研究の重要性を強調するメンガーを批判したシュモラーが抽象理論の前提する種々の条件に疑問を呈しつつ、歴史的・帰納的研究を擁護した論争である。本稿が目指すのは、「敵地」ウィーン大学に赴任したブレンターノが、歴史学派と自認してはいるものの、方法論争におけるシュモラーを否定的に評価していた点である。元来ブレンターノは、「因果関係の探求よりはむしろ描写」²⁴⁾を重んずるシュモラーの学説は、「経済現象の解明のための結論を何ら引き出すことはできない」²⁵⁾とみていたのである。一方で、ブレンターノは教授就任講演でメンガーの理論的立場に単純に与する見解を提示したわけではない²⁶⁾。同講演で彼は「いかにして、そしてなぜ、古典派経済学の抽象的方法から出発して、具体的経済状況の究明の方に移行したかを説明」²⁷⁾することを試みた。つまりブレンターノ自身が置いた焦点とは、メンガーや古典派経済学が依拠する抽象的な個人主義の不備を指摘しつつも、シュモラー的な事実観察に留まらず、(英国をモデルとして)共同性の回復を現実化する道筋を人間論として提示するというものである。

以上をまとめると、「古典派経済学」講演の意義は、「歴史」対「理論」の対立軸に沿った方法論争への直接的な貢献ではなく、経済理論が前提する孤立的人間像と、現実・歴史上で重要な人間共同体の様相とを分別した認識論にある。その点を詳しく見るべく以下で同講演の内容を見てみたい。

まずブレンターノは、古典派の経済理論への批判を明示するところから出発する。そもそもスミスやリカードなどは「可能な限りの最大の利益追求」(4)²⁸⁾を行う個人を公理的な類型にしたのだが、ブレンターノはこの仮定が現実の観察とは程遠いことを強調する。というのは「その筋の著述家たちを信用するならば、アメリカにおいてのみ、古典派経済学の抽象的な人間が、具象化している」(31)というように、経済人が現実に見出しがたいからだが、理由はそれだけではない。そもそも古典派経済学が労働者を「独立した多くの人間であり、その唯一の特徴は資本を持っていないこと」(7)と定義したのに対して、ブレンターノはそのような「個々別々の労働者による絶対の競争」(12)は、契約関係において弱者に過ぎない労働者の貧困につながることを重視するからである。このように、労働者・資本家・地主を個人で捉える類型を実際の状況に適用させると現実認識

23) 方法論争におけるシュモラーとの一貫性を重視するのは八木 [1988]。一方で、後の資本主義精神論への系譜を開いた点を重視するなど、歴史学派の発展における意義を強調するのは竹林 [2022]。

24) Brentano [1931/2004], S.99, 110 頁。

25) *Ebenda*.

26) 限界効用学説に立脚したメンガーへのブレンターノによる批判の論理的可能性について、Seewald [2010] が分析している (S.263-71.)。ただし、ブレンターノ自身は価値論ではなく人間論において経済学批判を行っている。

27) Brentano [1931/2004], S.142, 160 頁。

28) Brentano [1923/2008], S.4. 以下、本節では「古典派経済学」講演からの引用箇所は、本文中に頁数だけを記載する。

が歪曲されることに加えて労働者に不公正でもあり、(英国的な) 市民社会の意義を展開できない、という見解は、『現代労働組合論』以来、ブレンターノが一貫して抱いた認識だったといえる²⁹⁾。

ここで重要なのは、ブレンターノが、自己利益を追求する個人という前提自体が成立した歴史的背景にまで踏み込むことで、個人主義的な経済原理が登場した意味を問題化したことである。言い換えれば、ブレンターノはそもそも「どのような条件の下では自己利益の最大化の追求が経済生活を支配し、どのような条件では他の要素が決定的な作用を及ぼすか」(20) という問題を提示したのである。この主題への体系的解答は次節で見る「経済単位」論の完成をまたねばならないものの、「古典派経済学」講演では次のような示唆を与えていた。

ブレンターノによれば「歴史の初期においては、村落あるいはマルク共同体の共同所有に置かれる土地」(20) にしか人間は集住しなかった。商業活動とは、これらの共同体の境界線上においてしか行われず、共同体相互に対しては「利益の最大化を念頭に取引が行われる」(21) 一方で、内部の「仲間の間で交換が行われる場合、価格は権威と慣習 *Autorität und Herkommen* によって決定した」(21)。ブレンターノは、このように共同体という人間結合の内外で経済の論理が大きく異なることを強調した。そして、過去にあったこれらの共同体が、どのように解体されることで個人主義的な経済原理が主導するようになったか、という現実的推移に注意を払わないことこそを、抽象理論の弱点だとみなしているのである。

ここでは、原理的な問題として、「共同体」と「個人」の分別を強調するだけであり、次節でみるような解体の歴史過程そのものは包括的に論じられない。あくまでも「古典派経済学」講演時点でブレンターノが強調したのは、利益追求を不断に実行する経済人モデルが、社会的不公正をもたらす認識論である。ブレンターノによれば、イギリスでは 19 世紀に勃興した労働組合運動を通じて初めて、労働者階級が市場に正当に参与できるようになったのであり、それらを大陸諸国で実現させる重要性を提唱して、このウィーン大学教授就任講演を終える。

結局ブレンターノはウィーン大学には 1 年間しか在籍せず、1889 年にはライプツィヒ大学へ異動することになった。そのような経緯もあってか「古典派経済学」講演の反響としては、シュモラーの再現のように受け止められ、経済主体が孤立的経済人として確立される過程が資本主義の問題を意味する、という固有の論理には目を向けられることがなかった。しかしブレンターノ自身は、『歴史の中の経済人』[1923]の序文において、本講義の「叙述が更に其の後に続く凡ての講演と論文の出発点をなしているから、そのままこれを本書の冒頭に置いた」(VIII, 二)と述べるように、「古典派経済学」講演が共同体の人間論の認識論的出発を画した意義を強調している。

3 「経済単位」の概念と変化」における認識視座の確立

「古典派経済学」講演で提起された人間像の問題を体系的に発展させた論文が、1916 年出版の『近代資本主義の諸起源』に初出の「経済単位」の概念と変化についてである。従来この論説が「古

29) 『現代労働組合論』を執筆していた時期から、ブレンターノが英国「市民社会」の理念を重視していた点については、Goldman [2003] を参照。19 世紀の「市民社会」理念を英独の対比から明らかにすることを試みる同論文は、英国での経験を踏まえたブレンターノが、労働団結権を承認し得る社会状況がドイツに実現していないとみなし、「1870 年代のドイツの状態を嘆き、将来における真の市民社会を切望した」点を的確に強調している(p.108)。なお、ブレンターノの市民社会論と組合論構想の関係については、本稿第 IV 章 1 節で議論する。

典派経済学」講演から一貫した問題意識を持つ重要性は意識されていないが³⁰⁾、以下で見ていくように『歴史の中の経済人』の第7章に置かれた同論文は、ブレンターノの人間論的な経済社会史把握の包括的な枠組みが示されている。本節では、有機的人間結合が解体し個人相互での利益追求が支配するに至った歴史過程を、「資本主義化」とみなしている理論的な構造を分析する。

同論文の主題である「経済単位」は、「古典派経済学」講演において批判の対象とした孤立した経済人という前提を超克するための史的分析概念である。まずブレンターノは、経済単位 *Wirtschaftseinheit* という独自の概念を、次のように定義する。経済単位とは「単一の個人と同一の概念ではなく」、「元来の経済単位とは、いわゆる大家族であった」(263-4)³¹⁾。このような集団的行動原理の説明に関するブレンターノの議論の大きな特徴は、ここでも経済単位における対内的な行動原理と対外的な行動原理の峻別である。つまり、経済単位を具体的に考えると、古くは家族やギルドなどの相互扶助の有機的結合だったのである。このような経済単位は相互に「最大限の利益追求と無制限の富と権力への志向によって規定」(274)される敵対的な対外原理と、権威と慣習の支配の下での融和的な対内原理との、二つの特性によって規定されていた。

次に問題となるのは、旧来の経済単位が解体し社会における各個人が商業活動などの利己主義に巻き込まれていく過程の要因とは何か、という問いである。ブレンターノは海外市場での商業活動の広がりとその回答とみなす。海外貿易の伸長にしたがって、「可能な限り低いコストをもって、可能な限り多くを獲得するための営利欲求が経済生活を支配していくことで、権威と慣習に基づいて生産活動が規制される領域は喪失していく」(276)。こうして利己主義が社会経済の全体に浸透していく過程によって、旧来の経済単位が解体し、個別的な人間同士の利己的闘争が社会を支配してきた、とブレンターノは見ている。

つまりブレンターノは本論文において、資本主義化とは「経済単位の解体による経済主体の孤立化」を指すという、すぐれて人間論に依拠した定義を施したのである。このような概念化の結果としてブレンターノは「元来の歴史的共同体」→「共同性が解体された近代」→「共同性を再結集した未来」と、社会経済史を段階論的かつ体系的に把握し得た。

ここで、過去の共同体を有機的に結合してきた「権威と慣習」とは具体的にはどのようなものだろうか。端的には、共同体の内的紐帯についてカトリック教会の秩序をブレンターノはイメージしている。次章の主題と関わるが、彼は『歴史の中の経済人』第2章の宗教史論(1901年初出)において次のように述べていた。古代・中世の教父たちは、「買い手や売り手の主観的な評価とは無関係な公正価格 *gerechter Preis*」(2章・41)を提示していた。つまり、教会が慣習に依拠しつつ権威をもって提示した「公正価格」に基づく財産配分が、共同体内部の相互扶助的な原理を体現していたと把握しているのである。したがってブレンターノは、それらの有機的結合を失い人間が個別化したことを資本主義化の問題と考へて、その解決策を内的扶助を達成し得る労働組合に見出し続けていたのである。Ghosh [2016] は、ブレンターノの処女作『現代労働組合論』の「メッセージが『労働力の組織化!』という主張に要約でき、善き社会的・経済的組織化は不可欠である、という

30) そもそも、同論説を分析している文献が希少である。上田 [1987] は、例外的にこの論説の理論的内容についての概説的紹介を行っている(上田 [1987], 488-92頁)。

31) Brentano [1923/2008], S.263-4. 以下、本節では「経済単位概念と変化について」からの引用箇所は、本文中に頁数だけを記載する。なお、家族の共同性を根源的に重視する点は、次章で見るカトリックの補完性原則に近似している。

重要性が生涯にわたる関心事」であったと述べている³²⁾が、それらの共同体の実践論は、以上でみてきた原理的・認識論的な把握に支えられていたといえる。

本章の内容を小括しておこう。第 1 節は、『現代労働組合論』執筆までの足跡を辿ることで、ブレンターノが実践論として主導し続けた労働組合論と、その背景にある問題意識の出発点を考察した。第 2 節では、「古典派経済学」への分析を通じて、利己的・個人主義的な経済主体を想定する経済学一般を批判する視座を人間論から提示している点を確認した。第 3 節では、「経済単位の変化」において、それらの論点を拡充することで、経済主体の離合集散を通じて経済段階を統一的に把握し得た体系を考察した。つまり、ブレンターノの内部では、資本主義の諸問題も共同体の秩序の解体や再生によって、認識や克服がなされるという主張が、共同体の人間観において一貫していた点を確認した。

Ⅲ 宗教論における共同体の人間観

前章で論じてきた、共同性の様態を重視する認識が、宗教的社会観に導かれている点を本章は分析する。ブレンターノの宗教論については、従来ヴェーバーとの論争におけるピューリタニズム論のみが広く注目されてきた。本章では、ブレンターノのカトリックに関わる見解が、共同体的な人間観とも相即的な関係を結んでいる点で、思想全体を特徴づける重大な要素であることを析出する。

第 1 節ではブレンターノが、直接の教会信仰からは離脱した経緯を概観する。ただし議論の焦点は、それらの過程を踏まえてもブレンターノにとってはカトリシズムが生涯にわたる重大な関心事であったことを確認する点にある。

第 2 節では、1891 年から 1916 年の退職までの長きにわたってミュンヘン大学の重要人物であり続けたブレンターノが、大学内の教皇派勢力との対立を意識しながら、宗教史論を執筆した背景を分析する。

第 3 節では、『歴史の中の経済人』の宗教史論である第 2 章から第 5 章への分析を行う。教皇主導の歴史論を批判することを通じて、共同体の解体という近代経済特有の問題を解決するには、もはや世俗上の次元で別種の共同体（つまり労働組合）への結集を探る必要がある、とブレンターノが主張していたことを確認する。

1 ブレンターノとカトリックの関係性

南ドイツの保守カトリック層の出自で、生涯をその影響下で生きたブレンターノが、ローマ・カトリックを中心とした正統派のグループからは離反する独自の宗教的スタンスに至った過程を本節では明らかにしたい。

時代背景として、19 世紀のカトリック世界は大きな変革を迎えていた。加速する近代化・世俗化のなかで、キリスト教社会全体が変動に曝されていたが、とりわけ 1860 年代から 80 年代までのカトリックでは、教皇を中心として反近代化をカトリックの自己主張とみなす潮流が加速した。正統派は「近代的な世界、合理主義と物質主義に対する対抗モデルを提示」することで、「すべての

32) Ghosh [2016], p.40.

カトリック教会に対して世界観に関する教会の独占権を、強めようと」したのである³³⁾。他方で留意すべきが、当時のドイツには「近代的な教養と近代的な国家をそれほど敵視していない、教皇至上主義以前の、あるいは非教皇至上主義のカトリシズムがまだ存在していた」³⁴⁾点である。つまり、歴史家ニッパードが体系的に説明するところによれば、この時期のカトリシズムにおいては「脱近代」を訴える正統派信仰からの離反は、20世紀以降のように脱カトリックや世俗化を意味していたわけではない³⁵⁾。ブレンターノのカトリック性はこのような文脈において理解される必要がある。

さて、上述の潮流において、より直接にブレンターノ個人とカトリックの関わりに意味を持つのが、彼が経済学者として立身する以前に「非教皇至上主義者」として聖職に就いていた兄フランツがローマ・カトリックから離脱しており、同じタイミングで正統派に背を向けた経緯である。以下、1869年に「教皇不可謬宣言」に兄フランツが反発した過程を説明する。

発端は、19世紀後半以降、カトリック界で教皇の首位権と不可謬性についての神学的議論が活発化したことである³⁶⁾。個別の信者の主観性に真理問題が帰せられる割合が相対的に高いプロテスタンティズムと対照的に、教会が客観的な実在・制度として真理問題を独占するカトリシズムにおいては真理問題の究極的な根拠は重大問題となる。強権の指導力で知られたピウス9世が、教皇位への権限集中によるカトリック勢力の再結集を図ったのに対して、南ドイツでは、無謬性を教会制度全体の史的伝統に見出す「非教皇至上主義者」が影響力を持った。このような状況のなかで前章でも言及した、ブレンターノ家と密接な関連を持つケテラーが、フランツに教皇不可謬性問題に関する覚書の起草を要請したのである。

「労働者の司教」として知られるケテラーは19世紀の社会的カトリシズムにおける最重要人物であり、次節で論ずる回勅『レールム・ノヴァルム』の先駆者でもあった。彼は「同業組合を基盤とする有機的社会観の最初の理論家」³⁷⁾であり、前章で述べた通りブレンターノの社会認識に甚大な影響を与えていた。このケテラーが、ブレンターノによれば「無謬の教会役職は教皇職と司教職の共同体にのみあると力説して」³⁸⁾おり、フランツも全面的に協力したのである³⁹⁾。

ケテラーはフランツの手になる覚書をもって活発に運動したが、公会議の場で教皇不可謬宣言が可決されることとなる。こうして、教会に対する深い失望を抱いてフランツが1873年に聖職を離脱した。以上の一件を通じてブレンターノは、「ヴァチカンによれば、教皇が真理であると宣言したことは確固としており、学問には教皇が真理と宣言した事柄の正しさを立証する課題しか残され

33) ニッパード [2023], 10 頁。

34) 同上。

35) 本稿における19世紀ドイツのカトリシズムに関わる理解は、ニッパード [2021], 9-33 頁と、ニッパード [2023], 9-58 頁の体系的説明に依拠している。

36) 本段落の記述は、オーベール [1997] の123-31 頁に依拠した。

37) オーベール [1997], 317-8 頁。

38) Brentano [1931/2004], S.57, 63 頁。なお、引用文中の傍点箇所はブレンターノがイタリック体で強調している箇所である。

39) Ebenda. S.58, 63 頁。

ていないということになる」⁴⁰⁾と、ローマ・カトリックの正統派への不信感を表現し、「兄と私は以上述べたような理由で教会の信仰から離反した」⁴¹⁾と述べている。このようにしてブレンターノにとっては、知的自由の原則を強調することが、教皇至上主義勢力との対立姿勢を明示する際の主要な論点になったのだが、この点は本章第 3 節におけるミュンヘン大学総長就任講演でも一貫している。

しかし、ブレンターノの歴史・人間認識においてはカトリックが特別な地位を占めている点をここで強調しておきたい。彼は、1931 年時点でも「依然として、過去も現在も道德文化に対して教会が貢献してきたことを尊敬の念を持って認めて」⁴²⁾おり、その功績とは、「一つは中世において、カトリック教会が、権力者の暴力行為を抑制する唯一の力であった時に上げた功績、いま一つは現代において民衆の道德向上でいまなお上げている功績」⁴³⁾にあると評している。つまりブレンターノは、カトリック教会の主要意義を、各時代・各地域における共同体内の扶的原理を根拠づけ維持し続けた点に認めていたのである。

したがって次節でみるように、ブレンターノによるローマ・カトリックの歴史論への批判は、宗教全体の拒否を意味しているのではなく、人間共同性を重んじたカトリシズムの社会理念を当代において実現する道とは何か、を巡って生じた論争であったといえる。

2 『レールム・ノヴァルム』の影響

本節では、1891 年以降の宗教史論の時代的背景を概観する。Ⅱ章 2 節で述べたようにブレンターノは、ウィーン大学からライプツィヒ大学に移籍し、さらに 1891 年にはミュンヘン大学に異動した。彼は 1891 年以降の「10 年を通じて、ドイツの知識人層に社会改革への熱望を普及させるうえでの中心的な役割」⁴⁴⁾を果たすことになり、ミュンヘン大学在籍中は「偉大なる学問的成功の期間」⁴⁵⁾となった。学問・政策運動の両面を通じて、学内外で名声を博したブレンターノは、1901 年に同大学総長に就任した。

この総長就任講演で彼が選んだ題目「歴史における倫理と国民経済」が、後に『歴史の中の経済人』の第 2 章に収められる宗教論となる。本講演は、カトリックの教説と社会経済問題の関係を論ずるものだが、彼が学内の教皇至上主義勢力に対峙していたという背景が主題と密接に関わる。というのは、1890 年代以降のミュンヘンでは、ブレンターノの見解によれば、「政府や大学の同僚たちの弱腰のお陰で、教皇至上主義の要求はますますひどくなっていた」⁴⁶⁾。この状況で、彼が宗教的教説と経済問題の関連を論題に選ぶことは、ローマ・カトリックとは別の方向性から、カトリック教会も問題とした社会状況に立ち向かう立場の表明を意味したのである。この点を説明するためには、ピウス 9 世の後任レオ 13 世（在位：1878-1903）による回勅『レールム・ノヴァルム』の同

40) *Ebenda*. S.60, 67 頁。

41) *Ebenda*.

42) *Ebenda*.

43) *Ebenda*. S.331, 378-9 頁。

44) Sheehan [1966], p.116.

45) *Ibid*.

46) Brentano [1931/2004], S.220, 246 頁。

時代的な影響を勘案する必要がある。

レオ 13 世は、前任者の方針を転換して、近代固有の社会問題への対処を主導した点で知られる。19 世紀後半における労働問題の世界的な勃興とそれに伴う共産主義勢力の台頭に危機感を覚えていた彼は、1891 年に回勅『レールム・ノヴァルム』を發布し、全カトリック教会に社会問題への対処を呼び掛けた。労働者の隷属状態と階級間対立の機運を問題視した同回勅の趣意は、社会主義に対する糾弾と聖職者主導の職業組合の必要性の訴求にあった。回勅は、「衰えた社会を再生させようと思うならば、これをその起源にもどさねばならない」⁴⁷⁾として、教会の主導を通じての、同業組合を中心とした相互扶助の共同体の回復による労働者の権利保護を訴求した。

教皇の回勅として初めて、社会問題を扱った『レールム・ノヴァルム』は、カトリック界全体に深甚な影響を与えただけでなく、ブレンターノにとっても重要な意味をもった。彼自身が回勅について重視した論点は次の二点に大別できる。

第一の論点は、経済発展に伴って人間の個別化が加速したことで、社会問題が増大しているという課題意識への共感である。

前世紀は、かような人々を保護していた以前の職業組合を打ちこわしたものの、これに代わるものを打ち立てることができなかった。(中略)その結果、徐々に孤立無援となった労働者は、時がたつにつれて、残酷な主人、貪欲で無軌道な競争にもてあそばれるようになった⁴⁸⁾

と述べるように、レオ 13 世は歴史上の人間共同性の解体を問題視する。そのうえで、国家が共同性を独占するのではなく、中間団体としての組合への結集を論じた。この論点の背景には、カトリック社会論における「補完性原則」と呼ばれる理念がはたらいており、国家による公助ではなく「団体を結成し、自分たちの問題を処理し仲間を支援することを、キリスト教人間論に根ざす自助の理念の実践」⁴⁹⁾と考える社会観がある。ケテラーを先駆者とする、『レールム・ノヴァルム』のカトリック的社会観はまさにブレンターノの共同体論の礎石でもあり、両者は甚大な類似性を持つ。

第二の論点は、カトリック教会が古代・中世から経済問題に応答する、という使命を歴史的に担い続けており、19 世紀の当代でも一貫して人間の相互共同性を支える任務は教皇を中心とした教会が独占すべき、という主張である。回勅は「歴史は、かかる修道会が、現代まで、人類のためにいかなる救いの実を結んだかを十分に物語っている」⁵⁰⁾と宣言した。しかし、「非教皇至上主義」者であるブレンターノにとっては、このようなローマ・カトリックの正統派が近代の諸問題まで独占し得るという提題は容認し難かった。

先述の、総長就任講演が宗教史論を通じて大学内の聖職者等と論戦することになった背景とは、この点に関わっている。つまり、次節で詳しく見るように、ブレンターノは、『レールム・ノヴァルム』の問題設定(第一の論点)に共感を示しつつ、当代における解決の方向性(第二の論点)を批判する論陣を展開した。これを通じて、自身の組合論における理念は人間共同性の復帰であって

47) 中央出版社編 [1991], 57 頁。

48) 同上書, 21 頁。

49) 芦部 [2016], 126 頁。

50) 中央出版社編 [1991], 100-101 頁。

も、その方向性はカトリック教会から独立した世俗的次元にある重要性を教皇至上主義者に対して表明したのである。

3 宗教史論に見出される人間観

レオ 13 世がケテラーのことを「偉大なる先駆者」と呼称した⁵¹⁾ ことから分かるように、資本主義による社会的不公正の是正を目的として組合への結集を中心とした社会改革運動を提唱することは、同じくケテラーの影響を受けたブレンターノの政策的主張とも共鳴するところが大きかった。しかし、上述の通り、ブレンターノは『レールム・ノヴァルム』について、問題設定を高く評価する一方で、教皇の歴史的正当化に反駁したのである。そして以下で『歴史の中の経済人』宗教論から本稿が見出していくブレンターノの独自性とは、この屈折的立場に看取される。

すなわち彼は、共同体の解体という近代経済特有の問題こそが労働問題であり、古代・中世の社会教説に依拠しては適切な問題提起はなされないと（第二の論点を批判して）主張する。したがってブレンターノの宗教史論は、『レールム・ノヴァルム』における実践上の諸提案ではなく、教皇という絶対的権威が示した根拠づけに対する歴史的批判に主眼を置くことになる。例えばレオ 13 世は、トマス・アクィナスの教説を最重視し、社会主義への反論においても地上の財を公正に配分することは重要な社会的義務でありながら、それが最もよくなされるのは、私的所有という人間に最も適合的で正当な権利に沿うことを通じてである、とトマスの財産論を引照しながら論じた。

これに対してブレンターノが強調するのは次の点である。

レオ 13 世はトマス・アクィナスの熱狂的な追隨者であった。彼は、回勅 [『レールム・ノヴァルム』] のなかで繰り返し引用したのである。しかし、彼がアクィナスの追隨者であることを自認したとして、それは私的所有の原理によってそうしているのではない。彼の財産論は、アクィナスよりもはるかに近代的なのである。(5 章・202)⁵²⁾

ここからも分かるようにブレンターノの批判の要点は、共同性の解体の後にこそ近代社会特有の問題が発生しており、古代・中世のキリスト教社会教説を基準にしては、もはや十分な問題解決はなされ得ないという主張にある。以上をまとめると、ブレンターノにとって「歴史における倫理と国民経済」の目的とは、レオ 13 世が重視した歴史論を「評価基準として、いろいろの経済・社会現象を明らかにしようと研究している」⁵³⁾ 無批判的な前提を、倫理教説の歴史的吟味を通じて相対化しようとする試みである。

さて、ここまで述べてきた文脈を踏まえただけで、以下ブレンターノ自身が展開した宗教論の行論を確認したい。まず、総長就任講演「歴史における倫理と国民経済」と、その一年後の「古代キリスト教の経済教説」は、ともに過去の社会的権威の教説を現今の社会問題への対処に投影させる思考様式を批判し、教説の歴史的推移を跡付けるものであった。つまり、社会教説の形成において

51) 桜井 [2019], 20 頁。

52) Brentano [1923/2008], S.202. 以下、本節では『歴史の中の経済人』第 2～5 章からの引用箇所は、本文中に章数と頁数だけを示す。

53) Brentano [1931/2004], S.226, 254 頁。

特にトマス・アクィナスなどが果たした重要性を認めながらも、その背景には「経済発展の進行にしたがって、先験的な倫理的判断と社会の自然的基盤の間の矛盾によって倫理的教説の刷新がもたらされた」(2章・52)ことがあった、と強調することで、レオ13世の歴史認識を批判する視座が一貫している。このような観点からブレンターノは「反動的であろうと革命的であろうと、現存の生活条件や国家全体の問題と矛盾していれば、神学的教義の修正によって不合理を合理化しようとする機械的介入によって道徳的課題を達成するのは「もはや」不可能なのである」(2章・75)と結論付けている。

次に、『歴史の中の経済人』の四章「教会と自由への発展」は、「五章 所有に対する攻撃の系譜」と「同じ思想過程から生まれた」(序文・viii, 三)と述べている。これらの論稿も、「キリスト教は、その発展の歴史で、社会問題においては、社会民主主義的姿勢とは一切関係がなかった」(4章・145)と述べた司教を擁護するなど、「経済的便宜の原則が、自由の発展をもたらしただけではなく、その自由の発展こそが教会の見解をも刷新した」(4章・167)点を強調している。

これらを通じて、ブレンターノは、彼からすれば、無批判的に教皇に追従することで近代の問題も解決できるとみなした、当時の正統派カトリックと対峙していたのである。以上をまとめると、『歴史の中の経済人』の宗教論においてブレンターノは、カトリック的共同体秩序に重大な歴史的意義を見出しつつも、かつては教会が担ったような結合関係を実現させるような共同体が、当代においては世俗的に必要とされる、と主張する独自のスタンスを明示していたといえる。ただし、そのような人間観の背景には、当然のことながらカトリック的秩序への関心が一貫して見出され、また、それらを世俗の形態で表明したのが、前章で考察した労働組合論の提唱であった点を見逃してはならない。

以上、本章では、ブレンターノの内面においてカトリック的社会観が果たした役割を析出することに注力した。第1節では、当時のカトリシズムにおいては、正統派のローマ・カトリック教会への帰依を否定することが、脱カトリック化を意味しなかった、という歴史的背景を重視しつつ、ブレンターノに内在するカトリック的関心を整理した。第2節では、近代問題への対処を組合論などに求める『レールム・ノヴァルム』が、先駆者ケテラーを経由しつつ、ブレンターノの社会的意識と共鳴する部分が大いことを確認した。第3節では、『レールム・ノヴァルム』に内在する教皇中心的な歴史理解を批判することで、組合論などの補完性は、もはや(具体的には本稿第Ⅱ章でみた労働組合などの)世俗的・市民的領域において達成される必要があるとみなしていたブレンターノの主張を析出した。

Ⅳ 共同体の人間観の意義

本章では、ここまでの議論を踏まえつつ、ブレンターノ固有の共同体の人間観の意義について検討する。第1節では、ブレンターノの人間観の同時代的特徴を析出する。とりわけ、新歴史学派・最新歴史学派における同時代人との相違点を考察することで、ブレンターノの思想が「自由主義」という特徴付けだけでは把握できず、他の論者と異なる独自の「有機」的な社会観に留意する必要がある点を指摘する。

第2節では、このような共同体の人間観を特徴とするブレンターノ思想が内包している射程を検討する。具体的には、第二次世界大戦後の西ヨーロッパにおける社会政策の論点を先取していたブ

レンターノの社会観を考察することが、ドイツ経済思想の歴史的連関について、より理解を深めていくための里程標となり得る点を検討したい。

1 人間観の同時代的特徴

前章までみてきたように、共同体の人間観を重視するブレンターノの処方箋には、世俗的次元において実現されることを企図してはいたものの、カトリック的な秩序観が伏在している。この点がブレンターノの「有機体説的」要素への評価を巡る研究史上の難問を解く手がかりを示すものと思われる。その「難問」とは、本稿 I 章でもふれたように、ブレンターノの社会観における「有機体性」をどのように位置づけるか、というものである。

例えば、前谷和則は、労働組合構想が強制的であった点と市民社会理念の整合性を「最大の難問」とみなしつつ、ブレンターノの社会政策論における国家の機能に着眼することで、自由主義的という解釈を相対化し「国家有機体説的という歴史学派に共通な伝統的国家観」を帯びていた点を強調している⁵⁴⁾。前谷を含め従来の研究では、ドイツ社会経済思想における「有機体」を国家と同一視することで、市民の全体主義的服従を導く社会原理を「有機体説」と呼んできた。このような視点からすれば、確かに、国家を重視し、新歴史学派の「右派」と評されるアドルフ・ヴァーグナー（1835-1917）やシュモラーなどを「有機体」論者と位置づけることに支障はない。しかし、英国市民社会を推奨し⁵⁵⁾、自他ともに認める「自由主義者」であったブレンターノにまで「有機体説的発想」が見出される点は、解釈が困難となる。結果として前谷の議論では、ブレンターノにも終局的には国家主義的な性質があったものとされ、自由主義の特徴が実質的に蒸発することとなる。

このような解釈に反して本稿では、ブレンターノの有機性とは、カトリック社会論に特有の含意を帯びており、市民社会論と整合的であり得る社会観・人間観であった点を強調する。つまり国家有機体説ではなく、カトリック的補完性原則に基づく市民社会理念こそが、新歴史学派の中でのブレンターノに固有の位相を与える「有機的」社会観だったといえる。確かにブレンターノが、労働者に組合への結集を「強制」した理由とは、結合関係の形成そのものを、各主体による積み上げ型を期待するのではなく、一定の権威を前提とした共同体を先に設定して、そこに結集させるという組織構成観にある。ただし、彼のヴィジョンではこれらがあくまでも国家ではなく、「中間団体」としての労働組合によって達成される必要がある。このような人間結合観を支えるのが、適切な組織に結集してこそ、個人の「自助」だけでは不可能な、人格的な理念も実現できる、というカトリシズムに特徴的なヴィジョンだと考えられる。

2 ブレンターノの思想の射程

このようなブレンターノの経済・社会思想のヴィジョンは、20 世紀後半以降の西ドイツを中心として重視された社会観とも密接な関連を持っていた。彼が重視したのは、本稿が強調してきたように相互対等性を旨とする共同体への所属を通じて構成員が自己実現する、という共同体の人間観にあった。

このような社会観は、直接的な宗教理念を表明していなかったにせよ、「キリスト教民主同盟」

54) 前谷 [1984], 335 頁および、347 頁。

55) ブレンターノと英国市民社会概念の関係については、本稿脚注 29 に挙げた文献も参照。

などが提示する政策論と高度の類似性を持っていた⁵⁶⁾。この点について、Ghosh [2016] が次のように述べている。

ブレンターノは、単なる社会民主主義の主人公というだけでなく、彼自身もキリスト教民主主義に向かうカトリック的統合の先駆者である。これらすべての点で、彼は 20 世紀後半の西ヨーロッパの予言者として、ヴェーバーと同程度には傑出した人物だったのである⁵⁷⁾。

この言明に付け加えるならば、後代の展開を先取り得たブレンターノの「傑出」性の基礎にあるのは、本稿がここまで分析してきた共同性を最重視する人間観を根幹とする思想であった。

なお、ドイツ歴史学派経済学研究は近年、興隆を迎えつつあるものの、シュモラーやヴァーグナー、ゾンバルトに比して、ブレンターノへの関心は必ずしも活発ではない。しかし、本章でみてきたように、ブレンターノの社会観の「有機性」はカトリック社会論と密接な関係を結んでいる点で、新歴史学派のなかでも特異な位相にある。したがってブレンターノに着目することは、広義には、プロテスタンティズムを暗黙裡にキリスト教の主潮とみなしてきた研究動向を相対化し得ることに加え、ドイツ経済思想史に視野を限定しても、前後の時代との解明に大きな可能性を秘めているといえるだろう。例えば、原田 [2020] がアダム・ミュラーなどに着眼して 19 世紀前半の経済思想に固有の有機性やカトリック性を明らかにしている。したがって、ブレンターノを結節点とすれば、19 世紀前半の論点と 20 世紀後半以降の展開を接合することができ、当該分野の時代的連関も、より明示し得るものと思われる。

V 結論

本論文は、ルーヨ・ブレンターノの経済・社会思想の特徴が共同体の人間観に看取される、という仮説に基づき、経済論と宗教論の双方に見出される人間認識を析出することを試みてきた。第二章では、ブレンターノの経済学への態度を考察した。これを通じて、彼が方法論的意識においても政策論的提案においても一貫して、労働者が個々別々に分裂する状況を経済問題の根幹とみなしている点を確認した。第三章では、ブレンターノ自身が直接の信仰から離れた後も人間共同性を重視するカトリック社会論と理念的に相似した政策論を展開していた点を確認することで、彼の社会認識に一貫した特徴を与えた要因として宗教論をとらえる意義を主張した。第四章では、ブレンターノ思想の同時代的な特徴は、カトリック圏ならではの市民社会的理念に根差した自由主義的言説に見出され、後代との関わりでも、先取性や研究上の意義が認められる点を考察した。

次にブレンターノ思想に関する本稿の貢献をまとめたい。Ghosh [2016] の言を借りるならば、ブレンターノは従来「社会改革家や政治的リベラルとしての評価を受けており、確かにこれらは彼の来歴の半分を成してはいるものの、残りの半分、すなわち彼の思想の生涯は、等閑視され」る研究

56) 戦後西ドイツにおける「補完性原則」などのカトリシズムと社会政策の関係を立証した芦部 [2016] などを参照。

57) Ghosh [2016], p.81.

状況に置かれてきた⁵⁸⁾。このような状況において、かつて一條 [1990] は次のように問うていた。「思想家としてのブレンターノのおもしろさとは、いったいどこにあるのか」⁵⁹⁾。

一條の問いかけに引き付けるなら、本稿が解明したブレンターノの「おもしろさ」とは次のようなものといえる。つまり、彼はカトリック的知的環境に外在的な要因として置かれていただけでなく、そこから人間の共同性を最も重視する社会観を学び取ることで、社会思想の礎石を確立した。ただしブレンターノは、資本主義の全面侵食しつつある 19 世紀後半以降には、もはや旧来の教会主導の秩序への復帰によっては近代経済の諸問題が処理し得ないものとみて、労働組合論という市場経済の補完物によって解決されることを独自に目指した。ただし、その際でも、プロテスタンティズムや社会民主主義に依拠する他の「自由主義者」とは異なっており、カトリシズムへの理論的・心情的親和性を保持した点こそが、これまで看過されてきたブレンターノに固有の社会認識を可能としたのである。

もちろん、本稿がブレンターノ思想への包括的な解釈を完結させたわけではない。最後に、本稿が提起し得る研究課題を二点に絞って言及しておきたい。第一に、本稿ではブレンターノの宗教論に関して『歴史の中の経済人』に限定して考察してきた。これらが、当時の他のカトリック系の宗教史論とどのような関係にあるか、を考察することは、ブレンターノとカトリックとの関係性を同時代のなかでの確に位置づけるために不可欠の問題となる。第二に、本稿が叙述したのはブレンターノの人間観であり、思想の根底的な側面を明らかにすることを主目標としてきた。この原理的人間観が、彼の状況的認識や、種々の論争・紛争の中において、どのように貫かれ、あるいは屈折することとなったか、を明らかにすることは「実践の人」ブレンターノを把握する上で必須の主題となる⁶⁰⁾。本稿は、このような「経済思想家としてのルーヨ・ブレンターノ」への理解を深めていくうえでの端緒を提示するものである。

謝 辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。また、本稿は 2022 年 10 月開催の「第 259 回経済学史研究会」で報告した内容に基づいている。討論者の桜井健吾氏、司会者の原田哲史氏、指導教員の竹澤祐丈氏をはじめとして、本稿の執筆にあたって有益なコメントをいただいた皆様に記して感謝したい。

参考文献

※旧字・旧かなについては、現代語表記に改めた。また、出版年が併記してある箇所については、左側が原著の出版年、右側が訳書または復刊書の出版年を示している。

58) Ghosh [2016], p.17. 強調は引用者による。

59) 一條 [1990], 238 頁。当該論文での答えは、理論や、現実把握の鋭さではなく、第二帝政期という背景における自由主義的基調に向けられる（同書 238-42 頁を参照）。ただし、このような方向性での関心は必ずしもブレンターノ個人への把握には結びつかないだろう。

60) 思想家としてのブレンターノは体系的・理論的思索を紡ぐというよりは、それぞれの時期における論争の具体的・直接的文脈に対応している側面がはるかに強い。この点について、竹林によれば、『現代労働組合論』と、『イングランドの経済発展の歴史』（1927-8 年）以外に、体系的な著書を公刊せず、多数の論文やパンフレットを著したブレンターノの知的態度について、シュモラーは、それが大学での講義の負荷以外に、そもそもの論争的姿勢に基づくものだとして指摘している（竹林 [2022], 40 頁）。

- Brentano, L. [1871], *Die Arbeitergilden der Gegenwart: Zur Geschichte der englischen Gewerkvereine*, Duncker & Humblot. (島崎晴哉・西岡幸泰訳 [1985 年], 『現代労働組合論 上巻=イギリス労働組合史』, 日本労働協会)
- Brentano, L. [1923/2008], *Der Wirtschaftende Mensch in der Geschichte*, herausgegeben von Richard Bräu und Hans G. Nutzinger, Metropolis-Verlag. (田中善次郎 [1941], 『近世資本主義の起源』, 有斐閣, ただし田中による部分訳。)
- Brentano, L. [1931/2004], *Mein Leben im Kampf um die soziale Entwicklung Deutschlands*, herausgegeben von Richard Bräu und Hans G. Nutzinger, Metropolis-Verlag. (石坂昭雄・加来祥男・太田和宏訳 [2007] 『わが生涯とドイツの社会改革——八四四～一九三一——』, ミネルヴァ書房)
- Bräu, R., and H. Nutzinger [2008], *Einleitung* in Brentano [1923/2008], S.9–25.
- Ghosh, P. [2016], “From the ‘spirit of capital’ to the “spirit” of capitalism: German social and economic thought between Lujo Brentano, Karl Marx and Max Weber” in Ghosh’s *Max Weber in Context: Essays in the History of German Ideas c.1870–1930*, Harrassowitz Verlag, pp. 17–82.
- Goldman, L. [2003], “Civil Society in Nineteenth-century Britain and Germany: J. M. Ludlow, Lujo Brentano, and the Labour Question”, in Harris Jose ed. [2003], *Civil Society in British History: Ideas, Identities, Institutions*, Oxford University Press, pp. 97–113.
- Kraus, H.-C. [2000], “Lujo Brentano (1844–1931)”, in Heidenreich, Bernd ed., *Geist und Macht: Die Brentanos*, VS Verlag für Sozialwissenschaften, S.131–158.
- Seewald, M. [2010], *Lujo Brentano und die Ökonomien der Moderne: Wissenschaft als Erzählung, Empirie und Theorie in der deutschen ökonomischen Tradition (1871–1931)*, Metropolis-Verlag.
- Sheehan, J. [1966], *The Career of Lujo Brentano: A Study of Liberalism and Social Reform in Imperial Germany*, The University of Chicago Press.
- 芦部彰 [2016], 『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策 1950 年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』, 山川出版社。
- 石坂昭雄 [2016], 「ルーヨ・ブレンターノにおける「ピューリタニズム=資本主義問題」—商業の発展・宗教改革と経済倫理・イギリス産業革命—」, 北海道大学『経済学研究』, 66(2), 91–130 頁。
- 一條和生 [1990], 『ドイツ社会政策思想と家内労働』, 御茶ノ水書房。
- 上田辰之助 [1987], 『上田辰之助著作集 2 トマス・アクィナス研究』, みすず書房。
- 大塚久雄 [1969], 『大塚久雄著作集 第八巻 近代化の人間の基礎』, 岩波書店。
- オーベール・ロジェ [1997], (上智大学中世思想研究所編訳/監修), 『キリスト教史 9 自由主義とキリスト教』, 平凡社ライブラリー。
- 桜井健吾 [2019], 『労働者の司教ケテラーとその時代 十九世紀ドイツの社会問題とカトリック社会思想』, 教文館。
- 竹林史郎著・田村信一・山田正範訳 [2022], 『歴史学派とドイツ社会学の起源—学問史におけるヴェーバー資本主義論—』, ミネルヴァ書房。
- 田村信一 [1993], 『グスタフ・シュモラー研究』, 御茶の水書房。
- 中央出版社編 [1991], 『教会の社会教書』, 中央出版社。
- 中村貞二 [1999], 『増補 マックス・ヴェーバー研究』, 未来社。
- ニッパダイ・トーマス著・大内宏一訳 [2021], 『ドイツ史 1800–1866 市民世界と強力な国家 下』, 白水社。
- ニッパダイ・トーマス著・大内宏一訳 [2023], 『ドイツ史 1866–1918 労働世界と市民精神 下』, 白水社。
- 原田哲史 [2020], 『19 世紀前半のドイツ経済思想 ドイツ古典派, ロマン主義, フリードリヒ・リスト』, ミネルヴァ書房。
- 前谷和則 [1984], 「ルヨ・ブレンターノにおける国家と労働組合」, 『史学雑誌』, 93(3), 334–351 頁。
- 八木紀一郎 [1988], 『オーストリア経済思想史研究 中欧帝国と経済学者』, 名古屋大学出版会。